

2012年9月10日

第15号

NPO法人



**JSRC**

# Jomon Shiba



特定非営利活動法人

**縄文柴犬研究センター**

NPO法人



# Jomon Shiba

第15号



も く じ



マタギに思う ☆竹内誠一 … p. 2

ちよいと科学雑誌から ☆佐々木俊幸 … p. 3

シバの散歩道 15 ☆根深 誠 … p. 4

様々な日本犬との出会いを通して 1 ☆石井 勲 … p. 6

会員の声コーナー … p. 7

☆福井県・岡見さん ☆千葉県・藤崎さん ☆石川県・黒梅さん

☆愛知県・西谷さん ☆北海道・橘さん ☆福島県・一ノ澤さん

JSRC交流会宮城大会の様子…交流会のしおりから

平成 12 年度縄文柴犬研究センター(JSRC) 理事会議事録 … p. 14

事務局より ☆新入会 ☆会費 ☆子犬登録 ☆寄贈 … p. 15

## トピッ ク



7月7日、10時より、宮城県栗原市の門寿屋旅館さんを会場に平成24年度の交流会が行われました。参加者は宮城県、秋田県、岩手県の会員を中心として福島・群馬・新潟から、そして遠くは北海道・大分と総勢20名ほどの参加者が集い、賑やかに行われました。

交流会では、縄文柴犬に関わる学習会、各人一緒に会場にやってきた愛犬自慢を行い、参加者がお互い「イヌと人との生活」を改めて見つめ直し、柴犬に関する学習を深める機会となりました。

地産地消ならではの新鮮な食材を使ったお弁当で昼食を済ませた後、午後は理事会が行われました。

理事会では、NPO法人としての今後の研究センターの運営方針、運営方向の変更手続き等の確認が行われたほか、来年度の交流会(現段階では会場候補として岩手県を予定)の開催について話し合われました。



新人わんちゃんたちも登場です

## マタギに思う

富山県 竹内誠一

「マタギ」という言葉に、私は現役ハンターとして憧れを感じ、いろいろ学びたいと日頃から考えています。

東北地方、北海道でカモシカ、熊狩りを行う集団です。特に秋田県、青森県が有名だそうです。

当地、富山県には、そのような文化がありません。富山の伝統といえば、芦峯寺(あしくらじ)山岳ガイドが有名です。人々が、まだワラジを履いて登山していた頃からの伝統があります。また、その山岳ガイドの人たちは富山県警山岳救助隊結成当時の技術伝承やガイドを行っていました。

マタギの、山中においての技術、習わしに共通点があるのではないかと考えています。マタギは、森林の減少、カモシカが特別天然記念物となり禁猟となったことなどから、本来の猟を行う人が減少しています。この人たちは、日本古来から続く正統派の狩りの民あることは間違いのない事でしょう。

マタギに限らず日本の良き伝統が失われて行くことに寂しさを感じます。大切な伝承を守り伝えて行く必要があるのではないのでしょうか。

私がマタギを意識したのは、今年の猟期終了間際、2月8日に150kgほどのイノシシを射止めたことがきっかけです。

われわれハンターと、当時のマタギとは何が違うのだろうか。狩りをするということだけは、同じでしょう。しかし、その心がまえと方法が全く違うのではないのでしょうか。

マタギは、山は山の神が支配するところであり、獲物は山の神からの授かりものと考えています。したがって、山の神を信仰し、山の掟を守り、山では山言葉を使い、古い伝統と厳しい作法を守り、狩りをしていたようです。

ハンターは、単にスポーツとして余暇を楽しみ、自分の欲望を満たすための狩りであり、猟をするだけでしょ。

私はマタギを考えた時、これからは、単なるハンターであってはならず、マタギを思い学び活動することが必要だと考えるようになりました。

日本には、狩猟民族であると考えられる縄文人が住んでいました。縄文遺跡から発掘された犬の頭骨は、われわれの「縄文柴犬」と共通性があり、そのように呼ばれるようになりました。

縄文人は、日本人の祖先、そしてマタギの祖先として考えてもよいのではないのでしょうか。

一万年前のことになりますが、多くの遺跡から犬の骨が発掘され、狩りの良きパートナーとして活躍していたものと思われます。

われわれが、雪国と呼んでいる地方から多く縄文遺跡発掘されています。なぜ縄文人が雪国に住んでいたのだろうか。私は思うのです。それは、雪が生きて行く環境で欠くことのできない、必要な条件だったのではないだろうか。

もつばら彼らは、狩猟採取によって生きていたと思われ、獲物の動静には敏感であり、覚知した猟を行いたかったはず。その意味で、雪は天からの恵みだったのではないのでしょうか。

雪の恵みは、現在のハンターと共通です。無雪期は、生い茂る草木や樹林により獲物の発見が容易ではなく、たとえ犬が獲物を追い出しても銃を持たない彼らは、捕獲が困難だったと思われる。

われわれハンターは、猟銃を持っており、条件には恵まれています。

また彼らは、白い雪の中では、獲物発見が容易であるばかりではなく、雪上の足跡によって獲物の種類を判断し、その数や歩幅、乱れ方によって、その動物の行動の意味を読み取り、その足跡の新しさによって近くにいることを察知することが可能でしょう。その意味では、現代のハンターよりはるかに、動物的な対峙能力があったものと思われます。彼らは、その雪を最大限の味方として利用していたのではないのでしょうか。

縄文人は、鹿やイノシシ・カモシカ等大型の動物の狩りを行っていたと考えられます。これらは、体重の割に足底の面積が



僧ヶ岳の雪絵 菅笠をかぶった虚無僧を中心に左にウサギと猫、右に犬、馬に乗った人。昔は、田植之等の農作業に利用したとのこと。「マタギ」もこのような自然の造形美、微妙な変化を察知し利用し生活していたのではないのでしょうか。

小さく、雪に埋もれることから行動が緩慢になり、行動は制約されます。

その割に人間は、体重に対して足裏の面積が大きく、しかも皮で作った靴を履いていたと考えられ、雪中の行動が容易だったと思われます。

注目すべきは、縄文人は、弓を使い火を使う知恵があったのだから、もしかしたら「カンジキ」を使っていたかも知れません。

そのような事から雪が重要な狩りの協力者であったことがうかがえます。縄文人にとって、山野の行動は無雪期より積雪期の方がはるかに自由、敏速に移動していたであろうと考えられます。

また、雪を利用しての生肉の保存を体験的に知っていて、利用していたという説もあります。縄文人にとって雪は、天の恵みであり恩恵が大きかったと思われます。

縄文人とマタギ、そして現在のハンター、目的は、別として一種の共通点があり、学ぶことは学び、伝統や掟を後世に伝えて行くことが大切ではないでしょうか。われわれが守り育て、大切にしている縄文の血を引き継ぐ「縄文柴犬」を宝として後世に守り伝える必要があります。

ハンターとなり縄文柴犬と出会い、縄文柴犬をパートナーとして共に生きて行く、この犬は歴史からのプレゼントです。

これからも皆様と協力し一会員として、また、ハンターとしても頑張って行きたいと考えています。

(平成24年7月26日記)

### ちよいと科学雑誌から…

岩手県 佐々木俊幸

Noatinal Geographic 2012 年 2 月号 p.47

ナショナルジオグラフィック2月号では、「犬の遺伝子を科学する」と題して、ペットの進化に関する興味深い特集をしている。

私が特に興味を持ったところは、47ページの「独自に進化した”ビレッジ・ドッグ”」。

米国コーネル大学獣医学部のアダム・ボイコが、犬種の大半が作られたここ200年あまりの間よりも、ヒトに飼われ始めたであろう1万5000年～2万年も前に着目し、犬科の動物がまだ飼い慣らされていない時代に光を当てた、ビレッジ・ドッグのDNAの調査に乗り出した。エジプト、ウガンダ、ナミビアを周り300頭以上のビレッジドッグのDNAサンプルを集めて解析したところ、ビレッジ・ドッグ - オオカミ、ビレッジドッグ - イエイスの遺伝的な類似性は同程度。この結果から導き出された結論はビレッジドッグはペットのイエイスが野良犬となった雑種ではなく、何千年もの間、独自にヒトの近くで生き延びてきたイヌであるということであった。ビレッジドッグのゲノムはイヌ科動物が家畜化され始めた当初の状態を示しているという。

オオカミからイヌが分化したのは、ヨーロッパか東アジアであること、東アジアのビレッジドッグが他の地域のイヌと比べて遺伝的に多様であることがその後判明し、オオカミが飼われ始めたのは東アジアだと考えられるようになった。

ところが、アダムたちが2009年に行ったこの研究によってアフリカのビレッジドッグも東アジアと同じくらい多様性であることが判明し、しかも中東の大陸オオカミと共通する遺伝子パターンも発見され、この結果からイヌのルーツが中東だとする説が濃厚になった。

現在、この研究者たちはアメリカ大陸の先住民が飼っていたとされるイヌの研究を進めている。これまでの研究ではヨーロッパ原産のイヌしか見つかっていないが、南米原産のイヌが消え去った理由を探り出すことにより、ペットの犬種とは違う、自立で生きてきたイエイズ”ビレッジドッグ”のさらなる謎を解明していきたいとしている。



独自に進化した”ビレッジ・ドッグ”

ペットの遺伝子研究は、動物の歴史、行動の解明、そして飼育方法の改善に役立つ。その中でも、犬の遺伝子研究は、動物の進化と人間の歴史を明らかにする重要な手がかりとなっている。...

# シバの散歩道 (15)

犬猫看板観光旅行記 その5

根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)

翌朝、駅のコインロッカーに荷物を預け、電車で大阪城に出かけた。大阪城を訪れるのは高校一年生の修学旅行以来である。大阪城公園駅で下車し、園内に入ると、嬉しいことに飼犬をつれた散歩者が何組もいた。散りかけたサクラの木の下で宴会を催しているグループも目につく。飼犬といっしょに小宴を張っている男女もいる。

例によって、ワンちゃんの写真を撮っていいですか、と許可を求めると、いいですよ、どうぞ、と快く受け入れてくれる。なかには、そんな立派な犬じゃありませんよ、と嬉しそうに笑顔を見せて言うのだが、私には犬の種類も良し悪しもよはわからない。

「犬といっしょに散歩しているところを撮りたいんですよ」

その理由として、私は弘前の住人で、弘前市ではこれこれしかじか、それで全国各地をめぐり歩いていることを手短かに説明する。それでいながら、弘前市役所が設置した立看板が住民間にトラブルを引き起こしたり、はたまた鳥獣の変死、ゴルフの打球問題、人まで服毒自殺していることなど地域社会の恥部であり、そこまではさすがに言えなかった。

弘前市の「犬猫入園禁止」の文言について、犬や猫は字が読めないのに、どうしてそんなことをするんでしょう、と素朴な疑問を投げかけた婦人がいた。つまり、ここに問題の本質が潜んでいるのだが、それはすり替えである。犬猫が文字を読めないことは誰もが承知している。それを慇懃姑息に歪曲し、そのじつ、飼犬をつれた人に対して、公共の道路の通行禁止を強制しているのである。行政には、そのような権限は与えられていないし、できようはずもないと思われる。にもかかわらず弘前市では、というより担当責任者は、「市」という「公」を金科玉条のものとして公私混同しているのではあるまいか。

市議会で質問されると、市長は「説明責任がある」と言いながら、糞を放置する人がいるから、と責任転嫁して本質をぐらかすし、問題を放置し続けている。これでは責任ある説明とは言いがたい。

「公園に入っちゃいけないんだってよ。私たち、弘前に住んでいなくてよかったね」

飼犬に、こう話しかける婦人もいた。

「なんだ、そりゃ。マナーが悪い人がいるんだつたら、注意をうながすようにすればいいだろう。入るな、通るな、では話がぜんぜん違うだろう」

と声を荒げた若い男性もいた。

「飼い主同士のコミュニケーションにもなるしね。弘前はおかしなところですね。よくそんなことがまかり通りますね」

私が写真を撮りながら話しかけた人で、弘前市役所の「犬猫入園禁止」に賛意を示した人は一人もいなかった。弘前市役所の犬猫看板にかかわる担当責任者は、この事実を真摯に受けとめなければならないだろう。

東外堀で少年が二人、自転車を止め、ルアー釣りを愉しんでいた。微笑ましい光景である。私も中学一年のとき仲間と二人で、弘前公園の、釣りが禁じられている内堀で釣りをしたことがある。そのときは巡回中の看守に見つかり補導された。昔のことを懐かしく思い出しながら、公園の堀で釣りをしてもいいのか、と二人組の少年に声をかけると、「えーのや」 との返事だ。

肝の据わったもの言い、私は関西人の気質を感じて、さすが関西人は違うな、といささかひるんだ。写真撮っていいか、と聞く



敷物をひろげ、花見の準備をする飼犬をつれた家族



飼犬といっしょに公園内を散歩する飼主

と、ああ、とリアーを操作する手を休めることなく首を縦に振ってぶつさら棒に答えた。堀には水鳥が数羽浮かんでいる。白黒模様のキンクロハジロだ。冬鳥だから、もうそろそろ北へ旅立つのだろう。

「なにが釣れるの？」 「バスやねん」

土手に「大阪市公園条例第 3 条により、柵外への立入り、魚釣り、水あそびは禁止します 大阪市公園局」の看板があった。

釣り禁止の看板がそこにあるぞ、と私が言っても、二人は動じるふうもない。

「えーのや。誰も注意なんかせーへんのや」

権威にへつらう隷属的なわが故郷の人たちの性向とはだいぶ異なるようだ。

たいしたもんだな、と私は舌を巻いた。

前述のように、中学一年の私は仲間と二人で弘前城の本丸の下の堀で釣りをしている看守に補導され、竿を没収された。いま思えば、看守はやさしい人だった。先生に連絡しておくから明日、学校へ行ったら先生に謝りなさい、そのあと竿を取りに来なさい、と言った。いまより時代は遙かに大らかだった。

翌日、学校で担任の教師に謝ると、先生はなんのこともやら事情を飲み込めないでいた。しかし、そのうち察したようで帳尻を合わせた。そのことを竿を受け取りに入ったとき看守に話すと、看守は愉快そうに「うんだが、うんだが」と声を立てて笑い、お茶を勧めながら、こんどから釣りに来るんじゃないぞ、と注意し、竿を返してくれた。いまより時代は遙かに大らかだった。

大阪城の青屋門をくぐり抜け、極楽橋を渡り、私は入場券を買い求めて天守に上ったのだが、改札口で係員の女性にペットの入場について伺ってみた。

「犬猫などのペットの扱いはどうなっているのでしょうか」

「大きいのは迷惑になるのでダメですけど、小さいのは抱かかゲイジに入れるかしてもらっています」

「すみません。逆らうわけではありませんけど、小さいというのはどの程度のもので」

「そうですね。小型犬ですね」

なるほど、と思いながら、わが家の飼犬シバは小型犬なのに体重が中型犬並みだから、この場合はどうなるのか、とふと思ったが、訊く必要もなかった。

要は、今回の旅行の目的は、弘前というわが故郷の社会の異常性を確認することにあった。異常性を剔抉し周知徹底させることで、いずれ改善に繋げたいとの欲求がある。ここでどいようだが、誤解のないように述べておくと、私は故郷に悪態をついているわけでもないし怨み節を吟じているわけでもない。

ペットの入場料は？ と訊くと、声を出して笑い、

「もちろん無料ですよ」…その笑顔は、明らかに接客マニュアルのお世辞笑いではなかった。質問内容のおかしさに対してのようだった。あたりまえじゃありませんか、なにをおっしゃいますか、との片言が暗に、そのあとに続いているような気がした。

私は天守から下りて、元のコースを引き返したのだが、途中の園内の芝草で、女の子が父親と二人でタンポポ摘みをしている。

「お母さんにおみやげができたね」

という女の子の話し声が聞こえてきた。幸せそうな情景である。

大阪城公園から西ノ宮に行った。一九八二年、木村英造さんが理事長だった(財)日本淡水魚保護協会から派遣されて単

身、私はネパールへ河川調査に出かけたことがあった。九十歳を迎えた、その木村さんと何年ぶりかで会った。木村さんの人生は『木村英造 淡水魚にかける夢』(上野敏彦著・平凡社)に描かれている。京料理をごちそうになったあと木村さんの行きつけの喫茶店で二人でコーヒーを飲んだとき、犬猫看板にかかわる弘前の事情を木村さんに話した。

「そんなことって、通用するのかな。それが不思議だね」

… 木村さんはポツリ一言しか言わなかった。

弘前という地域社会では、旧藩時代の封建城主と農奴の人間関係がいまだに日常社会の基層をなしている。例えば、それに反旗を翻すとどうなるか。排斥しようとする力が働く。



犬猫看板は見当たらないが、こんな看板が目についた

喫茶店を出て、阪急夙川駅までタクシーで送ってもらい、別れた。

天気のいい日で薫風が香り、サクラの花びらが舞っていた。夙川駅一帯のサクラは「日本さくらの名所 100 選」に入っているそうだが、飼犬をつれて花見をしている人たちの姿が、私には桜吹雪の華やかに交じり合っただけで眩しく映った。もちろん、「犬猫通行禁止」を強いる看板は見当たらない。

私は木村さんと別れて、JR 湖西線の安曇川駅で下車し、翌日、高島経由で武奈が岳に登ったのだが、麓の「ガリバー旅行村」という有料のロッジやキャンプ施設のある場所で「ペット持込禁止」という威圧的な文言の看板を見た。公共の施設ではないようだった。しかし、せいぜい、倉敷のアイビススクエアにあったような「ご遠慮願います」が表現も軟らかくて妥当なのではないだろうかと思われる。ましてや高島は、近江聖人と謳われた江戸時代の陽明学者中江藤樹の出身地である。看板の文言は陽明学の思想にふさわしくない。



JR 湖西線の安曇川駅のホームから眺める武奈が岳

## 様々な日本犬との出会いを通してー 1

大分県 石井 勲

日本犬との出会い、そもそもの事の始まりは、犬を飼育し始めて半世紀近く、洋犬、雑種犬、日本犬のなかから狩猟犬を求め、犬探しに明け暮れたことに始まる。財団法人日本犬保存会への参加などを通して、猟師の間では、猪猟犬として小竹系に高い評価があることを知った。小竹鉄号など展覧会で大臣賞を受賞、乾号などは、紀州三大名系と言われていた時代である。

小竹系には、面白い逸話ある。紀州三大名系と言われても、たかが紀伊半島内の事、ローカル色の強い特徴のある個体とは思えないが、人為的に利害が絡んで三系にしたのかも知れない。

日本犬保存会には犬の評価(体形)基準に、標準(体形を規格化する)があり、この標準に適合しない日本犬は姿を消してしまった。私が参加した当時の展覧会では、日高系犬は展覧会の世界から消し去られていたが、登録上の在籍はあって、細々と猟師仲間の中で飼われている様子であった。私は小竹系が「至芸両全」だなどわめて保存会などを結成し、毎月一回イノブタを買い、横浜から三重県久喜青山高原にある猪訓練所に、仲間と二年間通い続けた。振り返れば、若さもあつたが、費用と労力は過大だった。「小竹系保存会」の対極として「牙の会」があり、この会は日本犬(古代犬)と槍で猪猟がスローガンの団体であった。会報も考古学の見地から遺跡の発掘などをして、日本犬標準主義から科学の目で日本犬を解析、原種の優位性の分析を試みていた。小竹系(日高系)保存会とも、友好関係にあり、会報の交換などもあつたが、レベルは月とスッポン(小竹系)だった。「牙の会」は会報二号で自然消滅した。期待していたが、残念。これも、時の趨勢だったかも知れない。

猟性能について、日本犬の世界でも一時的に高揚期があり、日本犬保存会でも、猟技会が開催されたことがあつた。小山宏氏が猟能技審査会委員長を努める第一回猟技会で、私の小竹系(日高系)犬が3位になり、総評で、「展覧会では通用しないが日高系犬猟犬として貴重な系統として、脈々と保存されている事を再考すべき」との言葉を戴いた。その意味するところ、あまりにも、規格化され、日本犬標準主義に評価される展覧会に暗黙の警鐘だったように思い、日本犬の限界を感じ、興味をうせて、会から自ら去ることにした。

アンテナをはり情報を集め、猪狩りの本場、関西はもとより、遠く山口県あたりまで、情報網を張り巡らせたところ、出雲の山奥での一人の猟師との出会いが、私の犬に対しての見識を一変させた。

和犬=古代犬、科学的に数値的に探求したわけではない。体験的、経験的(直感的)、と好奇心(非科学的)が犬に対しての考察を更に進化させ、猪犬の繁殖者としてある程度の見識を成立させるに至ったが、まだまだ、試行錯誤の段階だと思っている。

そんな探求の途にあるとき、縄文柴犬研究センターと出会ったのである。

この度は交流会に参加し、その晩に自由な意見交換会もしました。その会談は大変に貴重なもので、縄文柴犬への理解も一層深まりました。これからのJSRCへの関わりと経験など、犬に対しての私考を含めて、私も皆様と語り合いたいと思います。



交流会で紹介された石井さんの愛犬